

発行：(福) 十字の園本部事務局
理事長 平井 章

住所：〒431-1304
静岡県引佐郡細江町中川 7220-11
tel 053-436-9535
fax 053-437-1352

社会福祉法人 十字の園

ぶどうの木

(ヨハネ福音書 15章)



◆ 共に生きる ◆

御殿場十字の園 施設長 上野 貢一



御殿場十字の園では、利用者の話し合いの場として“よりあい”を行って、すでに4年半が経過します。初めは、施設の全面改築の時、利用者の皆さんのご意見を聞かせていただく為に始まりました。現在は、ユニットごとに、利用者の方のご要望やご意見を聞かせていただいたり、お互いの交流の場になっています。当然痴呆性のユニットでも行います。1ヶ月に2ユニット、各ユニットでは、3ヶ月に1回、施設長が出席します。私は、この“よりあい”を楽しみにしています。意見がなく歌になってしまうこともあります。先日、ひばりユニットの“よりあい”に出席しました。ひばりは、15人のユニットですが、比較のお元気な方がいるユニットで、1名病院受診の為欠席しましたが、残り全員の出席でした。ある利用者の方から、焼き肉を食べに行きたい。それも柔らかいお肉が食べたいとのご要望が出ました。1度店に行ったのですが、その店には段差があり諦めたというのです。この話には、多くの問題が隠されています。「施設の食事の肉が堅い」「高齢者だから肉よりも魚ではないかとの決めつけ」「店が高齢者向けに考えていない」等。しかし、この方の願いをなんとか実現してあげたいと思っています。一人一人の生き方を大切に、人と人とのふれあいを大切にする施設。暮らし方や、介護の方法が変わっても、たぶん、そのことは時代を突き抜けていくことでしょう。“よりあい”で、肌の温もりを感じ、共に生きる喜びの一部を味わう今日このごろです。



ユニットケアに一步前進 ～ソフトからハードへ～

理事長 平井 章

はじめに

既存の施設においてユニットケアを取り組む中で、浜松十字の園は、職員の意識改革から始め、サービスの質の向上、職員の質の向上を行ってきました。いわゆる「ソフト」作りです。(この経過については、「ぶどうの木」02年12月号に記しましたのでご覧ください)。しかし、それだけでは行き詰まりがあると、昨年度からは、ユニットケアの前進のために、生活環境の改修工事を行ってきました。いわゆる「ハード」作りです。ハードへの取り組みについて、本年11月14日に静岡県老施協特養部会職員研修会において「ユニットケアに一步前進～ソフトからハードへ～」と題して発表しましたので、その要旨を記します。

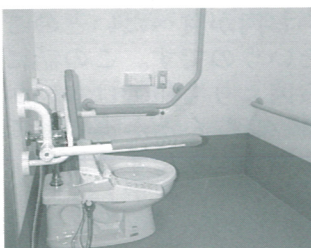
その1「普通の生活のための環境作り」

高齢者の文化にふさわしい生活環境を作ろうと、家庭用家具(多くは不用品コーナーやリサイクルショップで入手)を入れたり、観葉植物や鉢物を置いたり、美術協会や高校美術部から絵画を借りて展示しました。また、動物も飼いました。愛犬「リンちゃん」は皆の人気者です。家庭的な雰囲気ができました。



その2「うめユニット居室の整備」

改装前は、スチールの戸で、暗い感じの一人用トイレのついた個室でした。もともと重度痴呆老人のための個室で、管理的な居室でした。改修後は、和風の明るい個室になり、内側から鍵の掛かるプライベートルームです。洗面台も使いやすくなりました。トイレは、エンパワメントに配慮したトイレです。



この整備により、ショートユニットを独立し、在宅部門(デイ・ヘルパー・居宅支援)と一体化した組織にすることができました。

その3「浴室改修工事」

改修前は順送(機械)浴室でした。その部屋を分割して、個浴2槽の普通浴室と機械浴室ができました。一対一入浴を実施し、不眠の利用者は、夜間入浴でぐっすり寝るようになったといっています。浴室改修プロジェクトの名称は「湯ったり湯っくり入浴プロジェクト」です。

その4「もくれんユニット改修工事」

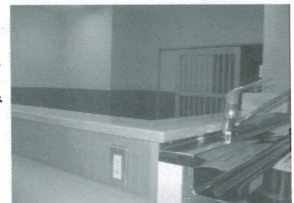
大きな食堂をユニット食堂と訓練室で共存していましたが、共存部の間にパーテーションを作りました。廊下との間の格子で生活感もうまれました。

その5「うめユニット食堂改修工事」

訓練室をユニット食堂・リビングとして利用していましたが、改修工事で、台所と手洗いを作り、壁と天井、電気の改修をしました。台所に立つ職員のうしろ姿がお嫁さんのようで美しく見えます。

その6「職員休憩室改修工事」

職員休憩室を改修して、カウンター喫茶になりました。パブリックスペースです。12月からは平日毎日オープンする予定です。



その7「集会室改修工事」

広い集会室をパーテーションで4つに分割しました。さくらユニット食堂、うめユニットのリビング、礼拝室(集会室)、和室(12畳)ができました。礼拝室と和室は一体化しているので、和室を舞台としての使い方もできます。



ユニット食堂と礼拝室の間のパーテーションは移動家具にしたので、敬老の日やクリスマスの時には集会室を拡げて使えます。

おわりに

これらの改修工事は、ユニットケアの実施と同様に、施設の理念「今、私の前にいる、その人の、すべてを大切にします」を具現化するためです。

クリスマスを迎える

社会福祉法人 十字の園 理事
(社会福祉法人 小羊学園 理事長)

稲松 義人



子どもの頃、どこの国のことだったかは憶えていませんが「クリスマス停戦」のテレビニュースを聞いて、「クリスマスだから戦争を休むなら最初からやらなきゃいいのに」と思ったことを憶えています。考えの浅い子どもですから、キリストに思いを向けるときに戦争は良くないと思うならクリスマスでなくたって戦争をすべきでないという発想だったと思います。クリスマス前後は、世界の多くの国ではお休みになっているということを大人になってから知ります。日本ではちょうどお正月のような感覚ではないかと思われれます。日本でも、政戦に精力をかける政治家たちも、企業戦士たちも、抗争を繰り返す暴力団などもお正月だから静かにしているという現象は感覚的に分かります。彼らにとっては、社会的に認知された共通の休日であって、たとえ初詣に行ったとしても神様に思いを向ける日ではないのです。一般的に耳にする初詣の願い事は、無病息災、家内安全、商売繁盛等々、結局は自分のための願い事です。

松崎十字の園の三條園長さんに初めてお会いしたとき「キリスト教では人のために捧げる祈りがある。福祉の仕事は、キリスト教の精神でなければできないと思っています。」と話されたことを思い出します。クリスマスのお祝いも、私たちにとって、ちょっとした休息、日常から離れた楽しみ、一年の締めくくりの感覚でしかないとしたら、クリスマス休戦と同じ程度のものでしかないかも知れません。神様に思いを向けるとき、私たちの毎日の生活は申し訳ないようなことばかりではないでしょうか。私など、いつもあちこちに謝りながら生活しているような気がします。でも、そんな私たちのためにキリストが来てくださったと思うとき、キリストとの出会い（誕生）は「たましい」の休息になります。そして新しく生きるスタートになります。どうか、十字の園の各施設でのクリスマスが、温かでスピリチャルな（霊的な）クリスマスになりますように。



御殿場十字の園 貴重なる遺産

社会福祉法人 十字の園 評議員 小堀 義雄

御殿場十字の園には、御殿場分園設立事務所時代より続く、機関誌「御殿場十字の園」があります。1970年（昭和45年）11月15日に創刊号が発行され、本年（2003年）10月号で163号を数える貴重なる記録であります。この記録をよりどころとして、33周年誌を発行しようと、現在、その準備中であります。このため、改めて創刊号より読み返す機会を得ることができました。紙面は、その時折の施設の動向や職員はもとより、各方面の方々に寄稿して頂いた文章によって構成され、30年の歴史が刻まれています。その中には今は召された方々の文章もあり、現代の私たちにも静かに論しが与えられる思いがします。

41号、42号に連載されている、西村一之牧師（前遠州栄光教会牧師）による「キリスト教精神にたって」の論文は施設とキリスト教の関係を明確に解き明かしています。結論として「キリスト教の精神というとき、信仰内容に関する教えを含むことは当然としても、むしろ、キリスト教的人道主義の意味が強い倫理的な性格をあらわすというべきであり、とくに福祉の仕事においては施設運営の責任者も職員もそして迎えられる老いて病む人々も含めて、寛容の精神によって一切の業務を行うことを目指す。」と記されています。

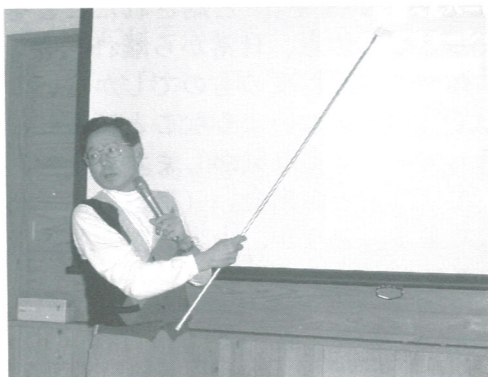
また、90号の鈴木生二追悼集には、初代理事長の人となり、その生涯の紹介が、各方面の方々によって記されています。これらの記事は凝縮された、十字の園創世記そのものであると思います。

他にも、また、その時、その時代に施設と関わって下さった方々、職員の思い、願いがつつづられています。これらの記事は御殿場十字の園、30年の歩みを示し、そして、1号、1号読み返す時に、これは御殿場十字の園の「失ってはならない理念であり、貴重なる遺産である」との思いにさせられます。「御殿場十字の園 33年記念誌」に一部転載したいと思っています。乞う、期待です。

2003年度 十字の園大会 in 浜松 11月13日～14日

今年度の十字の園大会は、1日目を浜松の北に位置する「静岡県立森林公園 森の家」にて、約80名の参加により開催されました。遠州栄光教会の飯島英雄牧師による開会礼拝に続き、「十字の園における福祉の創造～既に据えられている土台の上に～」を主題に今年度の大会が展開されました。平井理事長の挨拶の中では、皆で「十字の園の歌」を歌う場面もあり、豊かな緑に囲まれた会場で真剣な中にもほのぼのとした雰囲気のある大会となりました。

第1日目は、長谷川了氏による基調講演の後、各施設からの事例発表が行われ、今年度の課題テーマ「その人らしく生きることを支えるケアとは」について、浜松、御殿場、伊豆高原、アドナイ館、松崎の5施設の代表の皆さんによる熱い発表に参加者は熱心に聴き入っていました。



また、特別発表として、浜松十字の園診療所所長 後藤幸一先生による「十字の園診療所 10年をふり返って」をテーマに、先生のアメリカ研修時代のお話、昔の浜松十字の園の懐かしい写真、現在の姿や望むべき老人施設についてなど、後藤先生のユニークな話法に引き込まれるように時が過ぎて行きました。

大会2日目は、^{みくりや}接遇研修として講師に三厨万妃江氏をお迎えして、浜松十字の園に隣接する「おおぞらの家 療育センター」に場所をかえ、浜松の職員も大勢参加の研修となりました。

●基調講演 「出会い」



講師：長谷川 了氏
学校法人聖隷学園理事長
社会福祉法人十字の園理事

大会のスタートには、長谷川了氏に「出会い」というテーマで基調講演をいただきました。

福祉とは人間と人間との出会いから始まる。障害を持つ人に会った時、はたして私たちはその人と運命を共にすることができるのか。

講演の中で星野富弘さんのお話がありました。星野さんは不自由な体で草花を描いているうちに、それらが懸命に与えられた条件を受け入れているのを見て、自分も頑張ろうという気持ちが持てた。障害がなければ気づかずにいたであろう。苦しい時に踏み出す一歩は、その人にとって大きな価値があるのだ。

さて私たちはその一歩のお手伝いができるでしょうか。福祉人としての私たちに、今一度「人間の重み」を考えさせてくださるお話でした。

●接遇研修 「福祉サービスにおける接遇について」



^{みくりや}
講師：三厨万妃江氏
office M(オフィスエム)代表
人材育成コンサルタント

大会2日目。前日の熱気もさめぬまま、会場を移しての接遇研修が行われました。

介護保険制度施行から3年。選ばれる施設になるためには・・・！と何度も繰り返し自分に課しているはずなのに、なかなか身につかない「適切な態度や言葉遣い」。今回は、研修者全員が参加して、サービス業である私たちが執るべき「よいイメージ」創りのポイントを、人材育成のプロである三厨先生にご指導いただきました。

私たちの第一印象が施設のイメージとなっているのだという鋭い指摘から始まり、ぬくもりのあるサービス提供の為には、まず職員間のコミュニケーションが大切である、というお話をいただいて、それぞれが自らに課題を残した研修となりました。

施設発表の報告

「その人らしく生きることを支えるケアとは」を課題テーマとした実践が各施設から報告されました。

■ 浜松十字の園

ユニットケアが始まって2年が経過しました。この方法を取り入れて以来、利用者と職員の距離は縮まり、家族との関係もより良いものになったと誰もが思っていました。そんな時、施設長の机に届いた一本の苦情の電話から、今回の発表テーマとなったAさんと家族、看護師、ケアワーカー、相談員、栄養士等全ての職域を巻き込んだ、逃げることの出来ない挑戦が始まりました。

ケアワーカーとしては、信頼されていると信じていた家族からの突然の苦情は、家族の不信感をどのようにして信頼へと変えていけば良いのか。幾つもの疾病を抱えるAさんと共に、医師や家族との間で苦悩する看護・介護・相談員の取組みが報告されました。

■ 御殿場十字の園

御殿場では十字の園のデイ・ショート・ヘルパーを毎日利用している痴呆の方を取上げました。痴呆の方にとって日々環境が変わることは、望ましくなく、住み慣れた地域、そして自分の家で生活することが一番の理想と考えます。しかし家族の様々な理由や介護負担の軽減のため、サービスを利用せざるを得ないのが現状であり、今回はその葛藤の中、徘徊や不穏な状態から、安心して生活できる環境作りやケアについて取組みました。

取組みの中では、自分達には今何が不足しているのか、これから何を必要とするのか。一人の利用者を通して、デイ・ショート・ヘルパー・居宅介護支援の各セクションが、それぞれの場面で関わり取組む中で、多くの気付きを得る事が出来ました。

■ 松崎十字の園（オリブ）

施設開設より1年半を迎える身体障害者療護施設オリブでは、開所当初から生活されている頸髄損傷で上下肢機能障害のYさん（男性・56歳）への関わりについて取りあげました。

リハビリを多く行えば障害が良くなると思込んでいるYさんやご家族。障害を受容しきれずにいて、障害からくる消化機能低下による腸閉塞で入退院を繰り返すYさんに、食事摂取の方法や差し入れの取り決め、現在の身体の状態の受容に対する介護、看護、医療、障害福祉課等のサポートの様子、家族観（価値観）のギャップからの障壁（課題）について、思案しながら生活支援を行っている様子を報告にまとめました。

■ 伊豆高原十字の園

サービスを転々とされながら、意欲低下、ADL低下されてしまった方へのケアマネジメントを通し、“その人らしく生きることを支えるケアプラン”とは何かを考えてみました。

“生きることへの肯定感”が生活意欲や生活行為の源であり、生きる喜びや満足のある生活につながります。

これを引き出すために今、ケアに関わる私たち全員が、ADL中心のケアプランから生活支援中心のケアプランへと視点を変え、その視点に立ったケアがどれだけできるか、その人らしく生きるアプローチをどれだけ出来るか。現在も続く実践を通じた取組みが報告されました。

■ アドナイ館

ケアハウスアドナイ館は、平成5年4月に開設し、今年で10周年の節目を迎えました。

この10年の間に措置費制度から介護保険制度へと施設を取巻く社会情勢も大きく変わり、ケアハウスも県内には31施設（定員1,458名）となっています。ケアハウスの役割は自立生活者の支援ですが、入居者の平均年齢も現在80.2歳、要介護認定者は42%（ケアシステム利用者62%、ホームヘルパー利用者52%、デイサービス利用者67%、ショートステイ利用者31%、訪問看護10%、福祉用具利用者5%）となっています。

在宅サービスを含めたアドナイ館での自立生活状況と退居に至った方々の事例を通してその介護支援経過を検証し、今後のケアハウス支援に役立てたいと思いとまとめた内容が報告されました。

各施設のトピックス(特派員報告)



立ち止まって…振り返って…あともどり…か

伊豆高原十字の園 重永仁美

この10月でユニットケア体制となって丸1年を迎えた。社会では「全室個室＝ユニットケア」が当然の如く着実に増進している。すばらしい門構えをしたマンション式ビルディング。ロビーに立っただけで「アタシって金持ちA様？」って勘違いを起こしそうなピカピカの鏡張り。白や青の制服を着、介護職もナースシューズといった風体。それでもユニットケア。どこか遠くの背後から「形でない…心だよ…心。」って聞こえてきそう。

家庭らしさといっても十人十色で家庭が違う。形でいけばマンション一室も、一戸立て平屋もそれはそれ。ここ数年、福祉系マスメディアには「家庭らしさに近づける為に」とか「その人らしい生活を支える」とか“ヤッ”になる程掲載が続く。「～らしさ」＝「～にふさわしい」の意味。個性、人格等々。一体「らしさ」って何だろう。朝起きて服を着替えて身支度整えるこれって普通の生活。でもたまにはそのままパジャマでいたっていいじゃん!! 億劫で顔も洗いたくない、ご飯を食べるのも面倒臭い、今日は一日“ぐうたら”しよう。それでもいいじゃん! 規則正しい日があってダラシナイ日があって、夜更かししたい日もありゃあ、昼まで寝たい日もある。これが「～らしい」に直接関係あるかどうかわからない。でもしかし、そんな自由気ままな生き方が受け入れられる所があるとしたら…。それも一つの～らしさかな? そうこう考えたりしてみる。1年経って今、立ち止まって、振り返っては又、立ち止まってみて、ちっとも進みゃしない。それでもいいのかなって。まずはみんなで「考えようヨ」「いろいろ頭を使ってみようヨ」そんな毎日です。



手揉み茶でアフタヌーンティー

アドナイ館 三輪真理子

去る10月8日は「お茶の日」という事で、浜松茶手揉み保存会の方々6名が見えて下さり、朝8時から午後2時まで手揉みの実演をして下さいました。

緑茶に含まれるカテキンにはガン予防、ガンの転移を予防する効果の他に、花粉症、アレルギー性皮膚炎などにも効果があるとして注目されています。その他、美肌効果、動脈硬化の予防、血糖低下にも役立ちます。

食堂内は香ばしい香りに包まれ、見学している入居者の中からは、「ずい分手間がかかる物なんですね。」と感心する声が上がっていました。

併設のデイサービスのおやつ時間も振舞われ、喜ばれました。午後3時には入居者の皆さんが食堂に集まって来られ、出来たてのお茶を堪能しました。

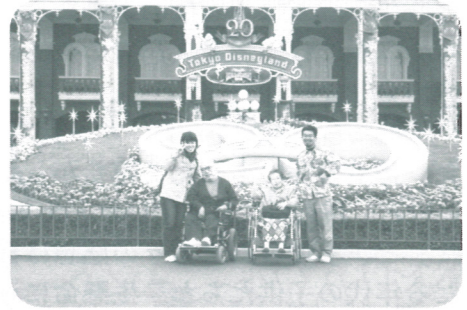
機械揉みをするにも、手揉みを経験していないと上手には仕上げられないとの説明を受け、技術の保存、継承の大切さを改めて知る事が出来ました。



ディズニーランドへ行ってきました！

浜松十字の園 今井優子

秋も深まった10月のある日の早朝、浜松から1台の車が東方向向かって出発しました。車内には、らんユニットにお住まいのM氏とSさんと職員3名。一行は『東京ディズニーランド』に出かけたのでした！ディズニーランドでは、ミッキーもドナルドダックも、M氏やSさんに大サービス。写真に写っておられるお二人の顔は、どれも笑顔+笑顔+笑顔でした。帰られてから感想を伺うと、ニコリ「楽しかった！」。でも、Sさんの唯一の心残りは「次の日に行った『お台場のブティック』で可愛い洋服を見つけたけど、迷ったあげく買わずに帰って来てしまった事」だそうです。Sさんの次回のお楽しみは、温泉に行きたいとの事でした。一方、M氏は「ずっとアメリカで暮らしていて17年前に日本に来たので、日本のいろいろな素晴らしい所に行きたいなー。」と話されています。



計画して実行して下さった職員の皆さん、ご苦労様でした。私たち職員は、お年寄りの素敵な笑顔が大好きです！これからも、いろいろな計画をして行きましょうね！！

売店「美久里屋」開店しました！

御殿場十字の園 高橋雅昭

施設の玄関を入りまっすぐ進んで左手に売店「美久里屋」がオープンしました。普段はお金を支払って、物を買う機会が乏しい施設の利用者さんに、お店の雰囲気を味わっていただきたい、という願いがきっかけでした。ショーケースや棚は全てお店などからいただき、何とか売店らしい形になりました。商品は主にお菓子、アイス、おせんべい、その他日用品などです。営業日は毎週火曜、木曜日で、喫茶「ぶどうの木」と同じ営業日に開店することで、売上アップを狙っています。



利用者さんの評判は上々で、毎回来ていただく方や、商品の前ですっとあれこれ悩む方など様々です。

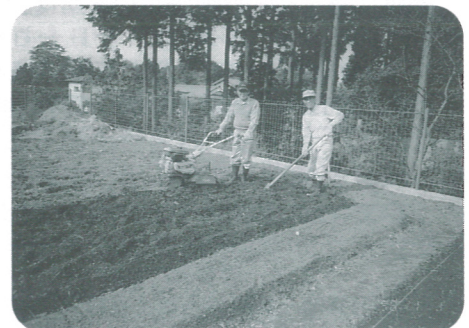
品揃えはまだまだで、コンビニとまでは言えませんが、今後はもっと品揃えを増やしたり、ワゴンに商品を乗せて施設内を回る移動売店など、利用者の方々のニーズに合わせてより身近で、より楽しく、そしてより多くの方に買い物ができるような売店になればと思っています。

畑作り・いい汗かいております

御殿場アドナイ館 田内博夫

ケアハウスの“畑作り”は2箇所で行われております。1箇所は、逆デイサービスで使用している民家の西側、約50㎡のほぼ長方形の土地。この土地は地元の農家の方が以前から使用しておりました。周りの防風林が大きく育ち、日陰になる部分が多かったのですが、お借りする事になり、周りの木の枝を落として下さったので、日が十分に当たるようになりました。これから冬場にかけて、キャベツ・カリフラワー・白菜が元気に育っております。

2箇所目はケアハウスの南側、約65㎡の三角形の土地です。日当たりはとてもよい場所です。土地を建設時に造成した所で、芝が植えられておりました。この芝を剥がし、石ころを取り除き、入居者が持ち込んだ耕運機で耕し、畑が出来上がりました。夏には胡瓜・ピーマン・オクラ・茄子等が出来て入居者・職員でいただきました。ねかしておいた落ち葉に、石灰窒素を混ぜて、化学肥料を加え、土地に力をつけて冬にはほうれん草・サヤエンドウが出来る予定です。



子供たちと一緒に心地良い汗をかきました。

松崎十字の園 山本 隆 弘

昨年、近所の保育園の運動会へ応援に出掛けたのが縁で、今年の運動会は、施設入居者のためにパン食い競争を企画して下さいました。

子供たちが可愛かった。パン食い競争に出たけど照れくさかった。孫や曾孫にも会えて嬉しかった。子供たちの顔は分からないけど、隣近所に住んでいた人たちが声をかけてくれて嬉しかった。と、参加された方々の感想は様々でしたが、孫や曾孫にあたる年代の子供たちが一生懸命に頑張っている姿を、暖かなまなざしで応援している表情が印象的でした。

知人の方々や子供たちと交わっている時、夢中になってパンを追っている時の表情は、施設の中では見ることができない生き生きとしたものがあり、地域の方々とふれあうことの大切さを改めて感じました。寒い時期に入り、外出する機会は減りますが、暖かくなったらどこへ出掛けようか？そんなことを入居者と一緒にワクワクしながら話し合っています。



オリブ式リハビリ法

オリブ 長倉 浩之

松崎十字の園オリブでは、平成15年1月より1名、6月よりもう1名の鍼灸マッサージ師をリハビリ業務職員として迎え、毎週月水金の午後（金曜日は2名体制で一日）利用者の方の機能維持訓練を担当していただいています。

障害を有する方の中で「どのような時障害を感じるか？」という問いに対して、「身体を動かそうとした（活動を始める）時」という答えを耳にしたことがあります。障害を有する方が活動するには私たち職員が思う以上の労力（気力）を使うことと思います。また高齢者の方が3日寝たきりの状態であると、元の身体機能に戻すのに3ヶ月かかるとも言われます。オリブ利用者の中にはリハビリを目的として生活をされている方も何



人かおられ、リハビリの時間を楽しみに頑張っていて取り組んでいます。私たち介護職員も毎日忙しい介護業務の中、活動するのに何が障害となり、どのようなお手伝いが必要か、心身のリフレッシュにどう関われるか、担当職員に助言を仰ぎ、「オリブでのリハビリ」を見つけていきたいと思ひます。

〈あとがき〉

十字の園は、どの施設も礼拝をもって一日が始まります。毎朝、牧師先生がおいで下さり、入居者や職員にとっても分かりやすく、御言を語って下さいます。毎朝、礼拝にお誘いするため入居者のお部屋に伺うのが私の日課となり、入居者とふれあうこの時間をとても大切にしています。

朝毎に語られる牧師先生のお話は、いつか見た映画のワンシーンであったり、今日一日を生きる糧となったりします。中でも最も印象に残る詩をご紹介します。皆様にも感動をお届けできればと思います。

皆様の 暖かい御支援をお待ちしております!!

〒431-1304 静岡県引佐郡細江町中川 7220-11

社会福祉法人 十字の園

理事長 平井 章

銀行振替 静岡銀行細江支店 普通 0015345

皆様の上にも、神様の祝福と恵みがありますように。

大事をなそうとして、力を与えて欲しいと神に求めたのに、慎み深く従順であるようにと、弱さを授かった。より偉大なことが出来るようにと、健康を求めたのに、よりよきことが出来るようにと、病弱を与えられた。幸せになろうとして、富を求めたのに、賢明であるようにと、貧しさを授かった。世の人々の称賛を得ようとして、権力を求めたのに、神の前にひざまずくようにと、弱さを授かった。人生を享受しようと、あらゆるものを求めたのに、あらゆるものを喜べるようにと、生命を授かった。求めたものは一つとして与えられなかったが、願いはすべて聞き届けられた。神の意に沿わぬ者であるにもかかわらず、心の中の言い表されない祈りは、すべてかなえられた。私はあらゆる人生の中でもっとも祝福されたのだ。

(ニューヨーク大学リハビリテーション研究所の壁に刻まれている作者不明の詩)